

には前に述べたやうに、初綴の母音は a と記されてあるが、第二綴の母音は省略されてあるから、それが u であるか i であるかは定め難い。

第二の *solmi* もしくは *sulmi* といふ名については、自分の知る限り従来學者の間に問題として取扱はれてゐない。但し新疆出土のトルコ文書で既に發表されたものゝ一つには、明らかに此の名が記されてあるのであるが、不幸にしてそれが誤讀されたが爲に、遂に検討の機會を失つたのである。一九一八年に伯林の F. W. K. Müller 氏は普魯西學士院の報告中に *Toxri und Kuisan* (*Küsän*) と題する論文を發表し、その第二節に於て三種のトルコ語佛典の奥書を譯述したが、その中の第二文書の末には、氏の讀むだ通り *sulmida* (*solmida*) といふ語が記されてある。氏はこれをその儘一箇の地名と考へ *sulmida* もしくは *solmida* といふのは *Calmadana = Ceren* と考ふべきであらうかと疑問を残した。その文書の斷簡はこの語で終つて次の紙面に移つて居り、そうして次の紙面は存しないのであるから、氏がかく解釋したのも無理からぬことではあるが、今こゝに示した文書にかく *solmi* (*sulmi*) といふ名が現はれて居る以上は、*sulmida*, *solmida*, の *-da* は接尾語に外ならぬこと疑ふべくもない。Müller 氏の解説した文書について考へて見ても、その前には *änätäk iltäki, antada, kuisan* (*küsän*) *ulusta* 即ち「印度の國に於て……」「そこ(印度)に於て」「クイサン(キューセン)の國に於て」の如く、皆各地名に第三格の語尾が附せられてあり、ついでそれと全く同格に立つべき語が *sulmida* (*solmida*) と記されて居るのであるから、この語尾の *da* は地名の一部分では無くして、第三格を示す接尾語と認むべきである。ただ印度やクイサン(キューセン)は「國」といふ語を伴ひ、それに第三格の接尾語 *-ta, -da* を附してあるのに對して、*sulmi* (*solmi*) には直接 *-da* を